

## 書評

小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編

# 『セクシュアリティの戦後史』

(京都大学学術出版会 2014)

福田 委千代



本書はシリーズ「変容する親密圏／公共圏」の第8巻にあたる。京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」の歴史研究班に所属するメンバーが、「現在の社会変動を直接的に考察するのではなく、歴史研究という手法を用い、セクシュアリティの問題を取りあげること、1970年代以前の社会のありよう、そしてその後の変容を明らかにしたい」(序章)という課題設定に基づき、「Ⅰ 純潔と異性愛」「Ⅱ 同性愛という概念」「Ⅲ メディアにおける性愛の表象」の三つのテーマから戦後日本のセクシュアリティのあり方とその変容について述べた、共同研究の成果である。

まず「Ⅰ 純潔と異性愛」では、「正しい」セクシュアリティとされるところの「異性愛」の、内実変化を問う五つのトピックが述べられる。「第1章 純潔教育の登場——男女共学と男女交際」(小山静子)と「第2章 純潔教育委員会の起源とGHQ」(斎藤光)では、「純潔教育」が登場した背景と目的を解析している。それによると「純潔教育」とは、「正しい男女交際のあり方」を説くことを要点の一つとし、そもそもは公娼制度の廃止と男女共学の実施という二つの事項に、その発生の源を求められるものであることが示される。即ち、制度廃止による私娼化を防止するための女性向け啓発と、片や戦前の教育とは大きく異なって男女共学が常態化してゆく中、適切な異性間交流の指南が必要という、風俗対策と青少年教育の双方から発想され実行に移されたのが「純潔教育」であった。但し、1950年代において「純潔」という語は、女性にとって「守らなければならない規範としてよりはむしろ、民主的で平等な男女の関係性を象徴するものとして意味づけられていた」(小山)点が指摘されていることは興味深い。

これを踏まえて、「第3章 異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」(今田絵里香)、「第4章 雑誌『平凡』に描かれた純潔」(中山良子)、「第5章『感じさせられる女』と『感じさせる男』——セクシュアリティの二枚舌構造の成立」(田中亜以子)が、1950年代の代表的な商業雑誌における記事と読者の反応を中心に分析をすすめ、当初は「民主的で平

等な男女の関係性」を象徴的に意味していたところの「純潔」が、守るべき正当な「価値」として意味づけられ、女性を拘束する規範として形成されていく過程が明らかにされている。

斯様に跡付けられた「異性愛」の正当性から、異端として周縁化されたセクシュアリティについて論じるのが、「Ⅱ 同性愛という概念」の四つのトピックである。「第6章 戦後日本における「レズビアン」カテゴリーの定着」(赤枝香奈子)、「第7章 パンパン、レズビアン、女の共同体——女性映画としての『女ばかりの夜』(1961)」(菅野優香)、「第8章 戦後日本における「ホモ人口」の成立と「ホモ」の脅威化」(石田仁)、「第9章 1970年代における男性同性愛者と異性婚——『薔薇族』の読者投稿から」(前川直哉)は、それぞれ女性同性愛と男性同性愛のカテゴライズ過程の解説と、メディアにおける言説の分析とを試みている。「異性愛」と「同性愛」を対置的に捉えるのはそもそもが危険であるが、たとえば第8章では、「異性愛」の日本社会的に正しいとされるゴールであるところの「結婚」が、1970年代においては同性愛者にも揺るがしがたい規範として内面化されており、それがために「同性愛」カテゴリー内にも、「異性愛」の「非対称性」を呼び込む因子となっていることが明らかにされ、今更ながら驚かされる。

最後の「Ⅲ メディアにおける性愛の表象」は、主に青少年漫画における性愛表現の登場過程を精査し、青少年にとって、就中少女たちにとってのセクシュアリティ規範がどのように変容していったかを具体的に辿っている。「第10章 Kissのある日常——『週刊マーガレット』におけるキスシーンの定着過程」(日高利泰)、「第11章 1970～1990年代の『セブンティーン』にみる女子中高生の性愛表象の変容」(桑原桃音)、「第12章 楽しむものとしての“性”はいかにしてもたらされたか——1970～1980年代の『少女コミック』の場合」(トジラカーン・マシマ)の三章では、恋愛漫画の表現分析やティーン雑誌における体験談レポートの分析を通して、青少年の「性」は隠蔽されるものからある程度オープンに語られるようになったことが具体的例示とともに述べられる。これは「Ⅰ」節で述べられた「純潔」規範の弱体化でもあるが、一方で「性」と「愛」の結びつきの強化から身体的負担を甘んじて受け入れるなど、少女たちにとってまた新たな条件規範が出来上がっていることが指摘されている。他方、「第13章 マンガにおける農村の「性」とジェンダー——「むら」のファンタジー」(一宮真佐子)および「第14章 女性ジャンルに表れる‘恋愛’と韓国女性——テレビドラマを通じて」(朴珍姫)の二章は、本書のこれまでの時代的な流れを概観・分析する研究方法を踏まえつつも、視点を「農村」あるいは隣国「韓国」へと移すことによって、新たに地域差という物差しで戦後日本のセクシュアリティのあり方を炙り出している。

本書を読まれた読者は気がついたことと思うが、本書の底に流れているテーマは、異性愛の脱自然化である。異性とつきあうこと、異性と性関係をもつこと、異性と結婚することは、誰からも何も教わず、「自然に」行われるものではなく、大量の知識が動員されつつ、「自然なこと」として構築されていくものなのである。その一端

を示したのが、本書である。わたしたちの多くはすでに知識としては、異性愛の規範化と、それと表裏一体である同性愛の犯罪化や病理化が近代社会において起きたことを知っている。しかし、それが具体的にどのようなプロセスを経て実現されたのかということになると、たとえ日本についてであっても、漠然とした知識しかもち合わせていないことに気づく。(あとがき)

そもそも、セクシュアリティとは限りなく私的な範疇に属するものと認識されているはずである。しかし、その「限りなく私的」な部分、もっと言うと、われわれが各人生において今や最も意味や価値を見出している「愛」にさえ、外部の力がさまざまなレベルで介入していることを、本書は豊富な具体例によって明らかにしている。日本人のセクシュアリティは、「異性愛」を常態として戦前戦後を通じて周到に構築されてきており、その意味では一貫性がある。だが、それは本書が明らかにしているとおりごく表面的な捉え方ではない。歴史研究がもつ大きな意味は、その変容の因果よりも過程を可視化させ、何事かの突端あるいは断面を生きざるを得ないわれわれの在りようを問う機会を与えてくれることだろう。

長期にわたって発行されている週刊誌等、膨大かつとりとめのない資料を対象に収集・分析する手法が本書では少なからず採られており、その意味でも相当の労作になる。現代日本人のアイデンティティを考える上でも、示唆に富む一冊である。

(ふくだ いちよ 日本語日本文学科准教授)